

Jinaputra. Ācārya Jinaputra

高 崎 正 芳

Jinaputra についての諸問題の中、ここで考察の対象となる事柄を次のように大別する。第一には、仏典に用いられている Jinaputra. Jinaputra と同じ用語と、その語が表現する意味あいについての一連の検討。第二には、同じ Jinaputra であり言葉の上からは相関するものであるが、それが仏典の造者に関連する人名、Ācārya Jinaputra として用いられている場合についての一連の検討。とくに人名をめぐって、関連する現存仏典と造者の位置づけを意図する場合に、役立つであろう考究の一端等について、以下にその論述を進めて行く。一 Jinaputra. Jinaputra は、言うまでもなく Jina-putra. Jina-putra じゐら、Jina. putra. putra の語は、仏典中に各が色々な場合に用いられている。だが今は Jina-putra. Jinaputra として出ている中から、主なもの用法と意味あいなどに観点をしぼって述べて行く。Jinaputra に関しては、現存パーリ語仏典での Milindapañha 中に見られる例が注意される。ミリンダパンハ自体の文献的な検討は、

既に諸学者による研究がなされているから、ここではそうした面の説明を特に必要としないであろう。ただ次に記す引用文は、その原典の成立や種々の経過過程をふまえた上で、理解しなければならぬ点のあることは言うまでもない。ジナプッタ勝者の子の一・二の例を示してみる。

もっともです。尊者ナーガセーナよ、甚深な問いは、種々の事例によってよく解かれた。深淵は明るくてらされ、結節は除かれ、密林は切りひらかれ、暗黒は光明となり、反対者の論は碎かれ、勝者の子（に智の）眼が生じた。――

「アーナンダよ、如来の舍利供養によって、なんじら自身、さまたげられてはならない」というのは、すべての人に関して言われたのではなくして、勝者の子たちに関してのみ言われたのである。大王よ、けだし勝者の子たちにとって、この供養なるものは、本務ではないから。

初めの例文は、慧眼を生じたことを云う場合の定型的な文章表現、とでも言えるものである。次の例文は、本経中の定型

句的な文章を含くみ、それは勝者の子(仏陀の子)と供養とを説くところで繰り返えされる。これらの経説から前後の文章と合せて、それが説かれた頃の勝者の子という語の意味を理解することができる。婆羅門や、諸王子その他一般在家者衆生とは語の用法と意味あいを別にして説いている關係上、ここの Jinaputra が仏弟子、比丘等を言うものであることがよくわかる。大乘仏典においては、Jinaputra の用法や意味あいを考察する場合、その例は資料的に豊かである。その中、特色をもつた対象を選び出してみる。瑜伽師地論についてであるが、漢訳では玄奘訳が最勝、真子、曇無讖・求那跋摩・両者の各別訳本では、仏子と訳してゐる原語が、Jinaputra である。チベット訳では Rgyal ba'i sras とするがチベット訳語の場合も、最勝子または仏子という語意を有している。瑜伽師地論のこのところでは、菩薩の種々な仮名をかぞえる中で、今云うシナントヲがあげられてゐる。即ち、最勝真子が Bodhisattva 菩提薩埵 Bryan chub sems dpah, mahā-sattva 摩訶薩埵 Sems dpah chen (po). Dhimat 成就覺慧 Blo dan Idan pa. Uttamadyuti 最上照明 Gal ba'i mchog. Jinādāra 最勝任持 Rgyal ba'i gshi. Vijetr 普能降伏 Rnam (par) rgyal byed. Jinānkura 最勝萌芽 Rgyal ba'i myu gu. Vikrānta 勇健 Rtsal dan Idan pa. Paramārya 最聖 Hphags pa'i mchog. Sarhavāha 商主 Ded dpon. Mahā-

yaśas 大称 Grags pa chen po. Kripālu 憐愍 Shin rje can. Mahāpunya 大福 Bsod nams che. Īśvara 自在 Dhan phyug. Dhārmika 法師 Chos dan Idan (pa) (漢訳は玄奘訳) などと共に記されている。これらはいづれも菩薩の仮名とされるが、論の中で更にそれらが、菩薩の徳は内に存し、想によつて得(仮立される)られると説いている。なおまた別などころでは、如理請問菩薩摩訶薩が解甚深義密意菩薩に問うて、最勝子と云い、解甚深義密意菩薩は如理請問菩薩に善男子と云う、そういう用法の最勝子が示されている。(解甚密經の文を引用しているところ) 大乘仏典の中、今は特に瑜伽論だけについて問題の一端を考察した。以上 Jinaputra についてはミリンダパンハでの用法と意味、Jinaputra の場合は瑜伽師地論での用法と意味、などに関する各の特色にふれた。二 Ācārya Jinaputra については、そのの仏典造者としての關係を、現存仏典の中に求め、他方側面的觀察などを加えて、仏典の造者、人物像の一面をとらえてみよう。その場合現在では、漢訳とチベット訳との仏典を主にして述べることにする。玄奘訳の瑜伽師地論積は、最勝子等諸菩薩造とされる。そしてこれにつながる事柄を記した、西域記の伝えが注意される。即ち、北インド(カシミールとパンジャーブ地区)の境、鉢伐多国 (Parvata = Jamu) の城の側に、玄奘の訪れた頃に大伽藍があり、僧徒は百余人、並びに大乘の教えを学んで

いたという。そしてその昔、慎那弗咀羅（唐に最勝子と言う）論師がここで瑜伽師地釈論を製したところであり、また賢愛論師・徳光論師の本出家の処でもある、と言う意味のことを伝えてゐる。瑜伽師地論釈の造者、最勝子（慎那弗咀羅）とその学説に関しては、慈恩寺基撰の大乗阿毘達磨雜集論述記の中にふれている。また成唯識論述記にも最勝子説に關説する。更にそうしたことが後の傳承などにも継承されてゐる面がある。翻訳名義集や枳橘易土集などでは、漢訳の傳承によるジナプトラ・最勝子についての記録をこめてゐる。次にチベット訳大藏經にある、Ācārya Jinaputra 造とされる伝典について考察をやる。a・影印北京版 No. 2036. 東北目録 No. 1145 と Dikon mehog gsum la bstod paḥi ḥgrel pa, Trinath-stotra-vṛtti. 三寶讚註がある。これは Matichira の三寶讚の Vṛtti と見られるものがある。b・影印北京版 No. 5547. 東北目録 No. 4046. Byañ chub sems dpahi tshul khriṃs kyī leḥu rgya cher ḥgrel pa [Bodhisattva-sīlparivarta-tīka]. 菩薩戒品広註。これは瑜伽師地論菩薩地・戒品の Tika と見られるもの。c・影印北京版 No. 5554. 東北目録 No. 4053. Chos mñon pa kun las btus paḥi bśad pa, Abhidharmasamuccaya-bhāṣya. 阿毘達磨集疏。これは無著・阿毘達磨集論の Bhāṣya とある。d・影印北京版 No. 5555. 東北目録 No. 4054. Mñon pa chos kun las

btus paḥi mñan par bśad pa shes bya ba. Abhidharma-samuccaya-vyākhyā-nāma. じれは前の c と關連する Vyākhyā とある。以上、チベット訳藏經にちかづく Slob dpon Rgyal baḥi sras, Ācārya Jinaputra. 軌範師シナプトラ（最勝子）造と記するものをあげた。なお、影印北京版 No. 2058. 東北目録 No. 1169. De bshin gśeḡgs paḥi mtsahan brjod bskal bzau rgyan gyi phren ba shes bya ba, Tathāgata-nāma-saṃgṛti-kalpika-bhadra-alamkāra-māla-nāma. 称頌如来名賢劫莊嚴鬘・についてであるが、この北京版のフロホンでは「Rgyal baḥi sras po（最勝子者）カンキミンのハンメンによる著作」であると記録してゐる。東北目録では、著者・訳者ともに Śākyaśrī の名を示してゐるが、シヤキヤンキリーはカンキミンのハンメンであることが、他の記述によつて知られるから、北京版の云う最勝子者カンキミンのハンメンは、シヤキヤンキリーを指すのかも知れない。ただ北京版のフロホンでは Rgyal baḥi sras po 最勝子なるものを、その表現を用ひてゐる Slob dpon Rgyal baḥi sras, Ācārya Jinaputra. 軌範師シナプトラ（最勝子）と記してゐる。今このことは、Ācārya Jinaputra を主として論ずる關係上、称頌如来名賢劫莊嚴鬘の造者名についての事柄は暫くおくことにする。また前掲の a・b・c・d の各に關連した、造者と内容の問題の細部についての論述

は、紙数の都合でここには省略する。しかしながら、c・dをめぐっては既に論述した点もある。そういう面とあいまいて、今少し個別的にb、即ち菩薩戒品広註を主に、注意される様相の一端を観察する。軌範師ジナプトラ(最勝子)造、菩薩戒品広註の始めには、次のように説かれている。

王子となれる文殊師利(菩薩)に敬礼してまつる。

六波羅蜜が常数であるが、また(論)中の教説の「一切における、自性による」(自性、一切)といわれる等は正にウダーナの一偈による教説である。(ここでは)正に九種によって戒の波羅蜜を設定することを知るべきである。九種を設定するのは、実以前の教説のごとくである。自性の教説から清浄の教説に至る等(のごとく)である。四種の功德を具す、と言うのは、四種によって菩薩の戒の自性を設定すると知るべきである。と言われる意味である。四種の功德は要略すれば二種によって設定する。云々、以下略。

こうした軌範師・最勝子造の広註と、瑜伽師地論、菩薩地戒品の説とを照合しなから読み、理解することにより、両者の関連や相異が浮かびあがってくるが、最勝子造広註の説き方の特色には注意すべきものがある。今チベット訳から和訳した文章においても、その一端を読みとることが出来るであろう。瑜伽師地論菩薩地戒品の註釈は、最勝子造の他、チベット蔵経の中に Slob dpon yon tan hrod, Ācārya Gunapra-

tha 造とせられる。Bryan chub sems dpahi shul khrimis kyi leṅu bśad pa, [Bodhi-sattva-śīla-parivarta-bhāṣya] 菩薩戒品疏・影印北京版 No. 5546、東北目録 No. 4045 がある。軌範師・徳光の著作とされるものはチベット蔵経中、この他にも比較的多く伝えられている。ともかく、菩薩戒品に関する註釈のチベット訳は、蔵経に収録される順序から見ると、徳光の戒品疏の次に最勝子の広註がおかれている。また分量は後者が前者よりも長文である。そう言う両者が各にその内容上の特質を有しているわけであるが、それらについては今のべないでおこう。ただチベット仏教の伝統において、徳光の律学は重要視されており、また徳光が世親に師事したとするチベットの一史伝にも留意しておく必要がある。徳光や最勝子の戒品の註釈は漢訳には現在しないが、他方既に関説したように最勝子等造の瑜伽師地論・一卷の漢訳(玄奘)が伝えられている。これに関係して、論記一や増明記一の記述によれば、釈論の梵本は実に多量であつたと言う。それにして、最勝子にかかる瑜伽師地論関係の、漢・蔵の註釈類が得られていることは意義深い。しかも各の註釈は、本論よりもやや後代に成立した面が観察される点で、その造者 Ācārya Jinaputra をめぐると他の著作(c・d)などとの関連(印仏研第十九の二・二四―二七頁)もまた重要となる。註略。